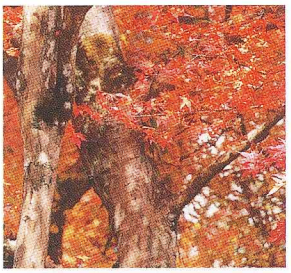
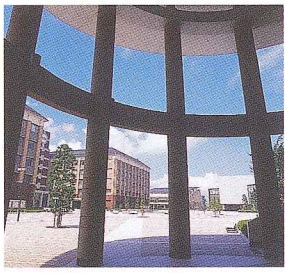
APU

[季刊] 立命館アジア太平洋大学プログレス・レポート　2000年

立命館アジア太平洋大学

PROGRESS REPORT

vol.14
AUTUMN 2000

世界四十七カ国・地域からの学生を迎えて―
ご報告と御礼

立命館アジア太平洋大学（ＡＰＵ）は、十月二日に秋期の入学式を執り行い、新たに留学生百八十五名、国内学生二十名を迎えました。これにより、国際学生は四百二十一名、国内学生は四百八十三名となり、学生の出身地域は、日本を含めまして四十七カ国・地域となりました。全学生が揃う四年後までに国際学生を世界五十の国・地域から迎えるという点では、当初計画を上回って到達することができました。ＡＰＵの最重要課題であります、多くの国際学生を海外各地から着実に受け入れていくうえで、開学初年度におきまして当初の目標を達成することができましたことは、今後の展望を大きく広げるものであり、私たちを大いに勇気づけるものであります。

このような到達点を築くことができましたことは、アドバイザリー・コミッティの皆様方をはじめ、多くの国内外、各界、各方面の関係者の皆様方からの物心両面にわたるご支援とお励ましの賜物でございます。ここに、改めて、皆様方に厚く御礼と心より感謝申し上げます。

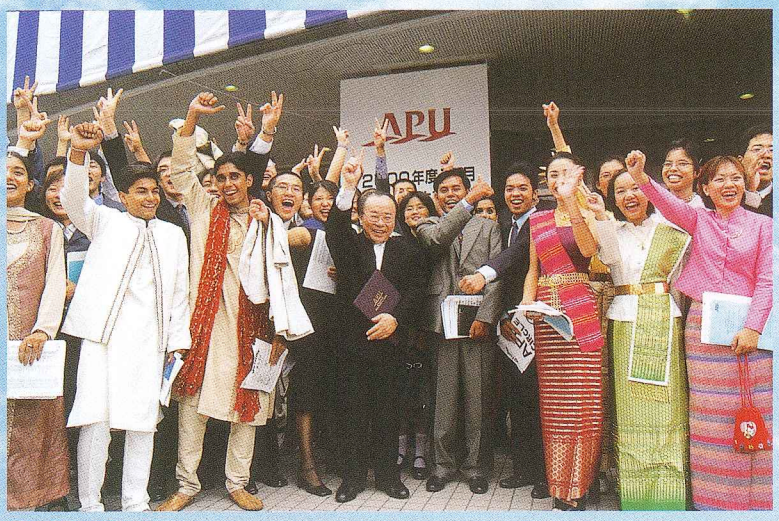
今、四十七カ国・地域からの若者が集うＡＰＵのキャンパスは、まさに二十一世紀のグローバル化社会を象徴するキャンパスとして、世界中の若者が行き交い、多様な文化交流の賑わいとともに、学び舎として学生同士が切磋琢磨する姿を見せております。多くの皆様方のご支援に支えられＡＰＵで学んでおります国際学生は、熱心に勉学に励んでおり、マルチメディア・ルームは深夜十二時の閉館時間まで学生の姿を多く見ることができます。一セメスターを終了した段階ではありますが、日本語能力の上達を実感するとともに、成績優秀者として表彰いたしました国際学生の多くは、皆様方のご厚志による奨学金を受給している学生諸君でございました。優秀な海外の若者に日本留学の機会を提供し、その期待に応えて努力している結果が結実したものと、重ねて御礼申し上げます。

また、夏休み前に開催いたしました教学・学生生活懇談会では、様々な意見交換が行われ、マルチカルチュラルな環境の中で、国内外の学生が良好な雰囲気の中で学生生活を送っております。学生諸君の成長は、私どもＡＰＵに勤務する教職員の励みでございます。私たちは、ＡＰＵが積極的、挑戦的に生きようとする世界中の若者にとって、共通の学びと交流の場となることができますよう、引き続き全力を傾注していく所存でございます。

今後ともＡＰＵの教育・研究や大学運営につきまして、皆様方からの一層のご指導、ご厚情を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

二〇〇〇年十一月

立命館アジア太平洋大学　学長　坂本和一

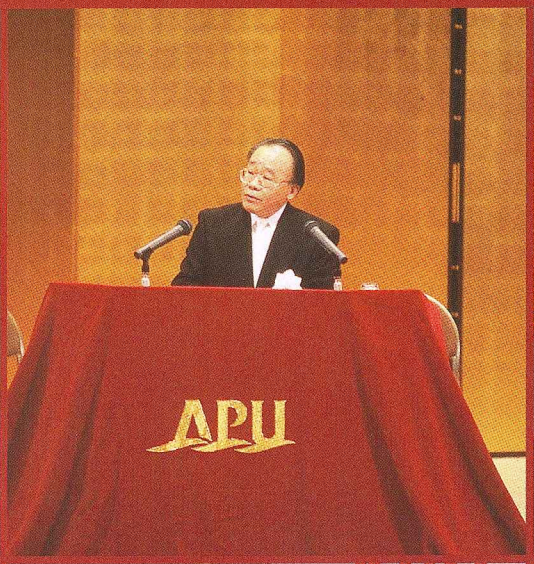


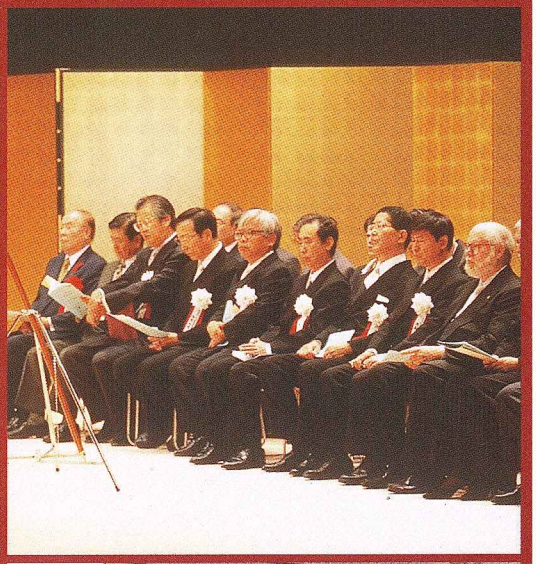
秋期入学式にて

APU 秋の入学式

新たに21カ国・地域からの仲間、205名を迎えて

10月2日、立命館アジア太平洋大学（APU）の秋期入学式を執り行いました。
APUは、諸外国の学年暦を考慮し、春・秋の二期制を採用しており、
この日は、国際学生185名、日本人学生20名の計205名が晴れて入学しました。
今回は、新たに21カ国・地域からの入学があり、4月入学生とあわせると、
10月からは、46カ国・地域からの国際学生421名、
日本人学生483名の計904名が、APUでともに学ぶことになります。

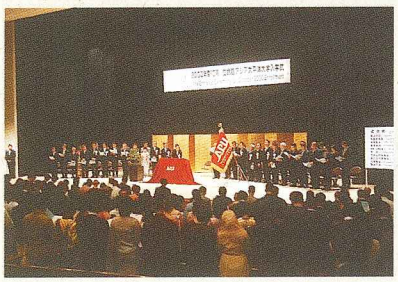




APUミレニアムホールで行われた入学式には、新入生、在学生、教職員を含め約三百名が出席しました。学園歌の斉唱にはじまり、坂本和一APU学長、長田豊臣立命館総長が挨拶にたちました。また、来賓として平松守彦大分県知事、井上信幸別府市長にご臨席いただき、平松知事からご祝辞をいただきました。

続いて、在学生を代表し、インドからの国際学生チョドリ　シュラダさんが歓迎の挨拶を述べ、それに応えて新入生代表の荒川　晋さん（愛知県出身・アジア太平洋学部）、シラペット　スーダリーさん（ラオス・アジア太平洋マネジメント学部）が、これからAPUで学生生活を送るにあたっての決意を述べました。

式終了後は、学生サークル代表や十一月に行う学園祭の企画を進めているイベントスタッフなど在学生約三十名がステージに上がり、元気な歓迎パフォーマンスを繰り広げ、大いに盛り上がりました。



Program of Ceremony

式次第

- ■開式の辞
- ■学園歌斉唱
- ■学長挨拶　立命館アジア太平洋大学長　坂本和一
- ■総長挨拶　立命館　総長　長田豊臣
- ■来賓・役職者紹介
- ■祝辞　大分県知事　平松守彦様
- ■在校生代表挨拶　チョドリ　シュラダ（CHOWDHURY, Shradha）
- ■新入生代表挨拶　荒川　晋
  シラペット　スーダリー（SILAPHET Soudalie）
- ■花束贈呈
- ■閉式の辞

◎入学式挨拶

Speech by Ritsumeikan Chancellor

立命館 総長
長田 豊臣

NAGATA Toyo Omi

世界各国から集い来った立命館アジア太平洋大学新入生の皆さんを、学園を代表して心から歓迎します。

立命館は、今から百三十年前に日本を代表するリベラリスト・西園寺公望がその家塾「立命館」を京都に創ったことに始まります。立命館学園は、中学校、高等学校、大学そして大学院の一貫教育を軸にした、個性ある、国際性豊かな高い水準の総合学園として、今日国の内外から高い評価を受け、注目されています。そして今年、立命館は創立百周年を迎えます。今年は本学の歴史にとっても、二十世紀を締めくくり、そして二十一世紀へ飛び立つ年であります。

今日、国際化が急速に進み、地球がますます小さくなるなかで、われわれは国境や狭い「地域」という従来の考え方で世界を観るのではなく、グローバルな広い視野でものごとを捉えなくてはならないと考えています。そして、貧困や圧政から自由な、よりよい住みやすい地球社会を創りあげていくための方法を探っていかなくてはなりません。これが新しい世紀の高等教育に要請されている課題であります。立命館アジア太平洋大学は、各国・各地域のいろいろな文化的背景を尊重して、人々が調和して生活していくための新しい価値観と作法を創りだしていくことを目的としています。

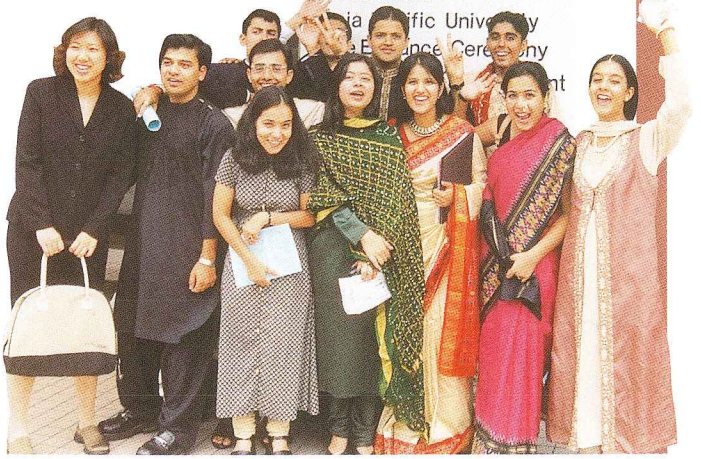
そしてわれわれは、立命館アジア太平洋大学を、多様な文化、価値、伝統を相互に理解し、人々が平和に共生することを目指すための知的および技術的訓練のアリーナとすることを、またそこで育った学生が、世界の各方面でのリーダーとして活躍することを心から期待しています。

皆さんは、いま立命館アジア太平洋大学の門をくぐったわけであり、このことは、皆さんが今日から大学での貴重な経験を始められることを意味します。重要なことは、大学に入ることによって、皆さんは「知」の創造に加わることになったということなのです。しかし私は、皆さんが、大学で知識の量を増やすことも大事でありますが、同時に、この国際大学で皆さんが今後経験することが決定的な意味をもつと申し上げたいのです。

経験は英語でexperienceと言います。その語源はラテン語の「危険に身を曝す」、「外から体を傷つけられる」という意味があります。ですから、経験とは、単に時間的経過ではなく、自己変革の持続的努力のことなのです。心や体に傷を負いながら、葛藤と煩悶のなかに身を置く行為だと言えます。この「経験」の技術は「知恵」と言い直してもよいと思います。「知恵」は、価値判断を停止してひたすら量の拡大に邁進する知識とは異なり、他者との出会いのなかで、身を切るような「問い」に曝されながら判断することです。皆さんは、文字通り二十一世紀創造の担い手であります。二十一世紀の地球の運命は皆さんの手に委ねられているのです。そして二十一世紀の新しい立命館や立命館アジア太平洋大学に対して時代が求めていることは、世界各地からここ別府のキャンパスに参集してこられた皆さんとともに、人間と人間との共生と人間と自然との共生のための教育と研究を粘り強く続けていくことにあると思います。

また立命館は、立命館アジア太平洋大学の開設にも象徴されるような、新しい二十一世紀の大学創りの先頭を走っていることでも、国の内外から注目され、評価されている学園であります。この大学を創設するにあたっては大分県、別府市、日本の経済界等の、国・内外の各界のリーダーでいらっしゃる諸先生方からの多大なご支援とご理解をいただいております。その意味では、立命館アジア太平洋大学は私立大学であっても、その性格は非常に公的なもの、国際的な使命と責任を帯びております。また、キャンパスが位置する九州という地域は、首都東京からは遠くても、アジアからみれば、アジアに最も近い所であり、日本のアジアへの扉として、歴史的にも現在においても、重要な位置を占め続けてまいりました。

立命館アジア太平洋大学を選んだ皆さんに敬意を表すとともに、手をとりあって理想の実現にむけて頑張ることを訴えて、総長の祝辞といたします。



◎祝辞

Congratulatory Speech

大分県知事
平松 守彦

HIRAMATSU Morihiko

本日、ＡＰＵに入学された皆さん、入学おめでとうございます。二十一世紀は「アジアの時代」といわれています。私は、一九七九年に知事に就任して以来、一村一品運動を提唱いたしました。この運動は、アジアを中心とする世界の多数の地域に大きな反響を呼び、今年別府市で第七回となるアジア九州地域交流サミットの開催、二〇〇二年ワールドカップ日韓共催などを通じて、これらの地域との交流を積極的に展開しているところです。

ＡＰＵを開学できたのは、「アジアとの共生」をめざす本県と、「アジア太平洋地域を担う国際的人材の育成」という立命館の考えが一致したことによります。本県が、アジア太平洋地域における人材育成の拠点として飛躍するための大きな一歩になると考えています。明治時代に、岡倉天心は『アジアは一つ』を著しました。現在、世界では、ヨーロッパにおいて欧州連合（ＥＵ）の下に各国が統合されつつあり、南北アメリカ大陸においても米州自由貿易圏（ＦＴＡＡ）構想が進められています。

このような中、私は、アジア経済圏（AU-Asian Union）構想を唱えており、その実現には、アジア太平洋地域のアイデンティティ確立のため、「アジア太平洋学」の確立が必須であると考えています。ＡＰＵは、「アジア太平洋学」を研究する大学です。皆さんには、素晴らしい教授陣によるご指導と恵まれた環境のもと、勉学に励んでください。また、本県の美しい自然や風土にふれるとともに、県民と積極的に交流してください。

皆さんのご発展をお祈りします。

◎新入生代表挨拶

Speech by Representative of New Students

アジア太平洋学部
荒川 晋

ARAKAWA Shin

本日は、平松大分県知事様、学園を代表して長田総長、坂本ＡＰＵ学長からお祝と励ましのお言葉を頂き、厚く御礼申し上げます。

新入生を代表して、一言述べさせていただきます。

私は、高校の三年間をスイスで過ごしました。ヨーロッパの文化や、歴史に触れながらの生活はとても充実したものでした。しかし、海外生活を通じて、自分に足りないものが見えてくるようになりました。それは、私が、アジアに属す日本人として、あまりにもアジアに対する知識が不足していると言うことでした。アメリカでホームステイした時、初歩的なアジアの歴史に関する質問にも答えられず、はがゆい思いをしたことを今でも鮮明に覚えています。海外のメディアを通して、アジアの情勢や日本での出来事を客観的に見ることができたのはすばらしい経験でした。その結果、大学ではアジア地域に関して学びたいという意欲を持つようになりました。

昨年の秋、交換留学で行ったカナダで、ＡＰＵの生徒募集ポスターを見たことがこの大学との出合いでした。日本の大学には類を見ない多文化環境、キャリア形成プログラムなど、まさに宝の山を見つけたようなものでした。ＡＰＵで、エクステンション及びインターンシップ・プログラムや国際交流プログラムに、積極的に参加していきたいと思います。そして、日本人というアイデンティティのみ

にとらわれず、地球人として様々な角度で物事を考えられる人間になりたいです。異文化への尊敬と理解を持った外交官を目指す私にとって、ここＡＰＵは夢を叶えられる場所だと信じています。

ＡＰＵには世界中から学生が集まっています。それは、言語や、異文化を学ぶに最適な環境です。私も、様々な国の学生から多くのことを学ぶと同時に、国内学生として国際学生の日本文化の理解に尽力したいと考えています。英語、及びアジアの言語を習得することや、国際的視野で物事を考えることは容易ではありません。また、時には摩擦や大きな障害に出会うかも知れません。しかし、それらを解決するカギは、異なる文化や個性を持つ学生同士がお互いを理解し、時には激しい討論などを通して友情を育むことだと思います。

私は今、ＡＰＵの第一期生として入学できることを誇りに思います。今年、立命館学園は学園創始百三十年、創立百周年を迎えています。立命館学園の長い歴史と伝統に恥じぬよう何事にも積極的に取り組みたいです。また、近い将来ＡＰＵが世界に認められる大学となるよう努力していきたいと思います。

最後になりましたが、大分、別府の大自然と、人々の温かさがＡＰＵと私達を支えて下さっていることに感謝し、私の挨拶の言葉とさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

● 立命館アジア太平洋大学　学部別・男女別学生数

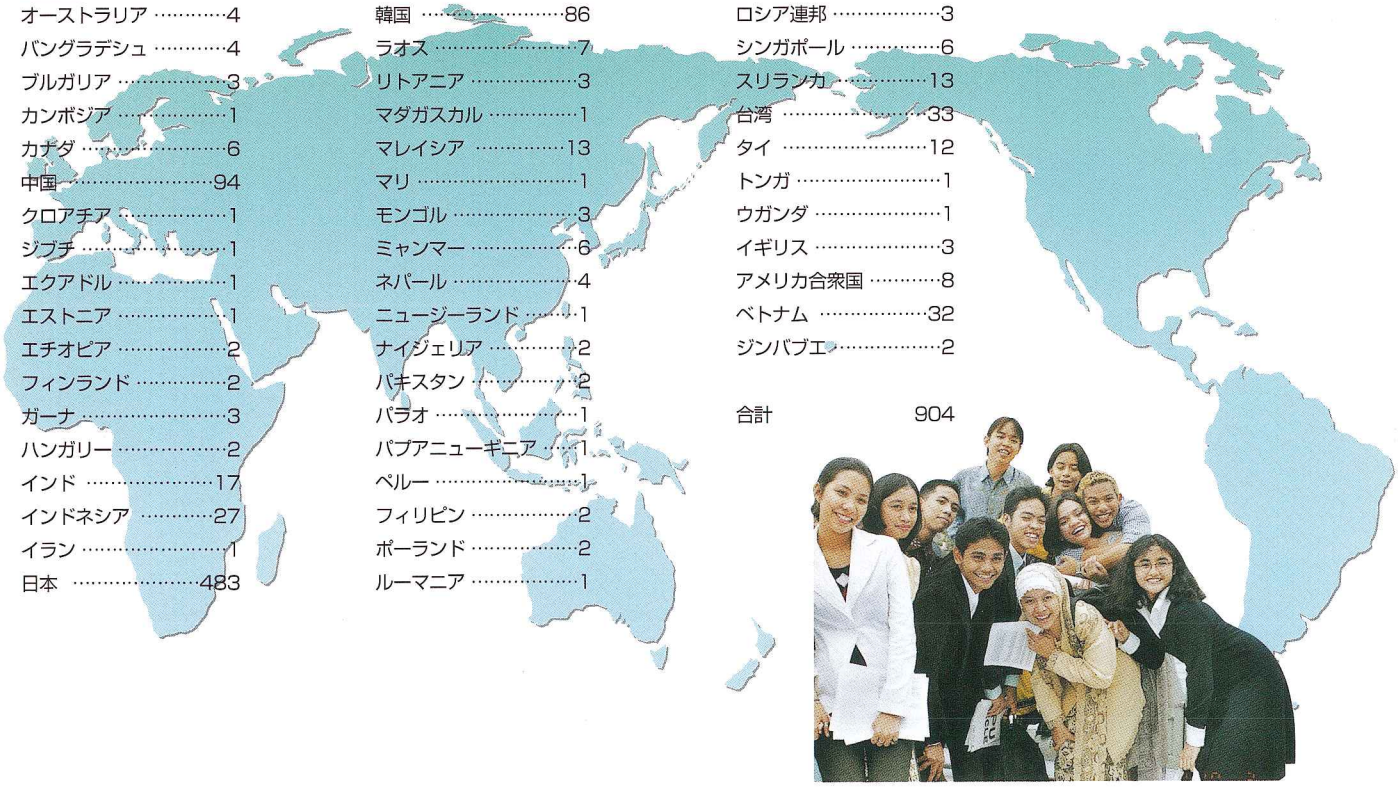
〈2000年10月 学生数総数〉

	男	女	合 計
アジア太平洋学部	190	245	435
アジア太平洋マネジメント学部	255	214	469
合 計	445	459	904

〈2000年10月 新入学生数〉

	男	女	合 計
アジア太平洋学部	43	39	82
アジア太平洋マネジメント学部	62	61	123
合 計	105	100	205

● 立命館アジア太平洋大学　国・地域別の学生数　（2000年10月26日付）



国・地域	学生数
オーストラリア	4
バングラデシュ	4
ブルガリア	3
カンボジア	1
カナダ	6
中国	94
クロアチア	1
ジブチ	1
エクアドル	1
エストニア	1
エチオピア	2
フィンランド	2
ガーナ	3
ハンガリー	2
インド	17
インドネシア	27
イラン	1
日本	483
韓国	86
ラオス	7
リトアニア	3
マダガスカル	1
マレイシア	13
マリ	1
モンゴル	3
ミャンマー	6
ネパール	4
ニュージーランド	1
ナイジェリア	2
パキスタン	2
パラオ	1
パプアニューギニア	1
ペルー	1
フィリピン	2
ポーランド	2
ルーマニア	1
ロシア連邦	3
シンガポール	6
スリランカ	13
台湾	33
タイ	12
トンガ	1
ウガンダ	1
イギリス	3
アメリカ合衆国	8
ベトナム	32
ジンバブエ	2
合計	904

Speech by Representative of New Students

アジア太平洋マネジメント学部

シラペット スーダリー

SILAPHET Soudalie

はじめまして、私はラオスのシラペット スーダリーです。どうぞよろしくおねがいします。

APUでともに学ぶ学生の皆さん、われわれを支えて下さるアドバイザリー・コミッティ、アカデミックアドバイザーの皆さん、APUの教職員の皆さん、そしていつも学生を支えて下さる地域住民の皆さん、おはようございます。

新入生を代表して申し上げます。六人のラオスの学生と皆で来日したことは、とてもエキサイティングな経験でした。私たちは、学士号を取得することと、世界から集まった友人を多くつくることという、二つの目標を共有し、立命館アジア太平洋大学へ入学しました。私は日本政府支援によるラオス政府派遣留学生として、ここに来ることができました。立命館アジア太平洋大学は、私にとって価値のある教育を保証しています。私自身、その環境を存分にいかしながら、APUで身につけた知識や経験を、将来のキャリアと母国の発展に役立てることを確信しています。

私のもう一つの使命は、現在は発展途上にあり、皆さんにあまり広く知られていない母国・ラオスの代表として、積極的に他国の学生との架け橋となり、伝統や文化を交流することによって相互理解を深めていくことです。

私はAPUに来て、キャンパスが新しい点に加えて、設備がとても充実しているという印象を受けています。ライブラリーやパソコンルームをはじめ、体育館の設備にも驚きました。今後、キャンパスライフを豊かなものにするためにも、積極的に活用していこうと思います。

私は一九九八年に、奨学金をもらってオーストラリアで二年間勉強し、マーケティングの資格を得ることができました。そして今再び海外で勉強する機会を与えられ、APUに来ています。このAPUという多文化環境の中で、ラオスからの学生として初めて勉強することになる一人であることを、大変誇りに思っています。

最後に、この機会を提供して下さった日本国政府・JICE／JICAに感謝を表すとともに、目標達成に向けて一生懸命勉強を頑張り、APUの皆さんや大分県民・別府市民の皆さん、JICE／JICA、ラオス国政府それぞれの期待に応えるように全力を尽くすことを約束します。

新入生代表挨拶というこの素晴らしい機会を与えていただき、本当にありがとうございました。

日本政府留学生支援無償事業により ラオスの六名の学生がAPUで学ぶ

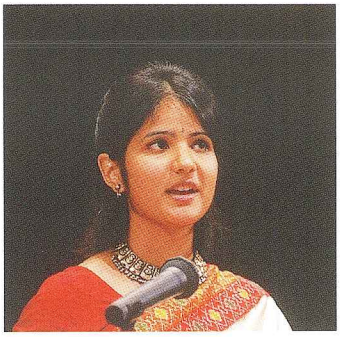
長年にわたり、日本政府はODAプロジェクトによる橋梁、ダム、その他各種公共事業の支援を通じ、途上国の開発・発展に貢献してきました。近年、「顔の見える」国際貢献の重要性が日本政府において説かれるようになり、援助プログラムの一つとして、途上国の「人材育成」の重要性が高まってきました。

外務省ならびにJICAでは、これまで数年に渡り、アジアを中心に現地調査を実施し、第一回目の受け入れ国としてラオスとウズベキスタンの学生を日本の大学へ招聘し、学位又は修士を取得させることを昨年決定し、今年から当地の学生が日本で学ぶことになりました。この事業は、ラオスまたはウズベキスタン政府からの派遣留学という形を取る一方、学生の渡航準備から来日、大学での課程を修了する為の経済支援や人的支援の多くを日本政府からの無償支援で行うものです。JICAでは、今次事業の実施にあたって、日本側の受け入れ大学の選定調査を行い、英語による受講が可能であり、法学・国際関係・経済・経営等、派遣国の需要を満たすコースを設置している大学を検討した結果、受け入れ五大学のうちのひとつにAPUが選ばれ、このたび学生受け入れの依頼をいただきました。この事業により、今年度は約二十名の大学学部生・大学院生が日本の大学で学ぶことになり、そのうちラオスからの六名の学生がAPUに晴れて入学しました。

◎在校生代表挨拶

Speech by Representative of Students

アジア太平洋学部
チョドリ　シュラダ
CHOWDHURY, Shradha



平松大分県知事・井上別府市長・立命館長田総長・坂本APU学長・学部長・教職員、そして立命館アジア太平洋大学でともに学ぶ皆さん、在校生を代表して、ここで挨拶を申し上げることを大変光栄に思っています。APUの全学生に代わり、本日入学する新しい仲間へあたたかい歓迎の言葉を送りたいと思います。

APUは、開学から「もう半年」が経っています…というより、「半年しか」経っていないと言った方が適切でしょう。APUで勉強することを決心した私たちは、この大学が誕生したばかりで歴史・伝統が未だないということを認識しなければなりません。創立百周年を迎え、日本有数の大学の一つとして数えられるようになった立命館大学とは違って、APUの未来創造は私たち次第です。つまり、私たちこそがこの大学の歴史を創ることになるのです。これにより、自分たちの夢と熱望を基にAPUを創造し、学生の期待と要求に応えられる大学を創る特典もまた、私たち自身に与えられています。従って、大学のためだけでなく、自分たちのためにも明るい未来を創造する責任を感じることが大切です。私たちのAPUを、日本国内だけでなく、世界においても競争できるだけの大学にし、APUの卒業生であることを自慢できるように頑張らなければなりません。

つい半年前に、新入生として皆さんと同じ立場にあった私には、今皆さんが抱えている不安や期待、夢、希望がよく分かります。しかし入学後半年が経過し、私たち在校生はおおよそ、ここでの生活に慣れてきました。国や家族、友人を離れて来日した国際学生にとっては、大分・別府・亀川・鉄輪の住民の皆さんの、あたたかい歓待が本当に心強いです。これから先、私も皆さんとともに勉強し、遊ぶことを楽しみにしています。開学したばかりのAPUで初めて学ぶ私たちにとって、確かに初めは苦労が多かったのですが、自分たちで解決策を探りながら、同時に色々なことを学んできました。これからはその点をふまえて、皆さんに対して、いつでも、どこでも、助言・援助をしてあげることができれば、と思っています。

四月に行なわれた私たちの入学式では、学生の大半は国内学生でしたが、ここに二百名を超える皆さんが入学することで、学生の半数を国際学生が占めるという目標がほぼ達成されることとなります。しかしながら、APUを私たちのニーズに応えられる大学とするためにも、日本国内の学生と協力し合い、言語・文化・経歴の違いを乗り越えなければなりません。五月のAPU開学式典で、John Ruggie（ジョン ラギー）国連事務総長特別補佐官がAPU学生へのメッセージでこう述べられました。

「よりよい明日を創るために、今日という日を懸命に生きることをあなたたちに望みます。さまざまな違いがあろうとも皆同じ人類の仲間であるということを、国際大学の学生であるあなたたちが誰よりも理解しているはずです。」

皆さんが認識しているように、競争の激しい国際舞台で活躍するには様々な文化や価値観を包容できることが不可欠です。多数の国・地域の人々と交じり合い、共に勉強する機会にあふれているこの大学では、アジアの世紀とされている二十一世紀の要請に応え、成功するプロフェッショナルになるための最高の経験を得られるはずです。お互いの相違点を超えて、APUで過ごす四年間を共に成功させることができたならば、地球の未来想像図が描かれます。私たちは、このようなユニークな経験に恵まれただけでなく、世界の未来を創造し世界で重要な役割を果たす機会にも恵まれています。様々な背景を持つ人々が集い、仲良く生きる可能性を世界に証明し、未来の世界制度の規範となることが望まれます。

私の言いたいことは以上ですが、皆さんに伝われば幸いです。

ご静聴ありがとうございました。

10月入学式で新入生歓迎行事を行った「イベントスタッフ」から一言

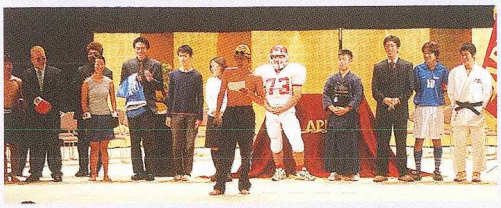
左から小森勇佑さん、中村竜太さん。

入学式で新入生歓迎行事をしようということになったのは、9月末に行われたリーダーズキャンプでのことです。あまり時間がなかったこともあり、最初は代表者のスピーチ程度と考えていましたが、サークル紹介も兼ね、サークル代表がそれぞれのユニフォームを身に付け、壇上に上がることになりました。勢いだけでやったという感じですが、入学式後は、新入生を胴上げしたり、在学生と新入生が一緒に写真を撮ったりしていたので、いい雰囲気だったと思います。

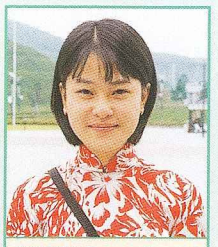
「イベントスタッフ」としての本格的な活動は、5月20日の開学祭から始まりました。

現在は11月に行う学園祭に向け、スタッフ一同頑張っています。すべてが一からのスタートで、何のノウハウもなかった私たちですが、職員の方をはじめ、各サークルや企業の方々、また市民の皆さんにも協力いただき、企画の一つ一つが徐々に実現に向かって動いていることを実感しています。

まだまだ力不足で不安もありますが、APUの記念すべき第1回目の学園祭成功のために、全力投球していきたいと思っています。



新入生インタビュー



NGUYEN Duong T.
スエン ツイ ズオン
［ベトナム］

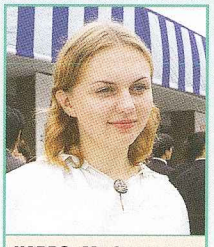
私は小さい時から日本人と日本語が大好きでした。日本人の仕事に対する姿勢もいいと思いますし、また実際来日してみて日本が気に入りました。私の国はまだ発展途上なので、マネジメント学部を選びました。貿易の仕事に興味があります。ベトナム発展のためのお手伝いがしたいです。

JOSHI, Pratyoush B.
ジョシ プラソウスハ
［ネパール］

APUでは世界各国の人々が家族のように集い、相互に理解し合っているように思います。世界中をまわらなくても、そうした環境がここでは手に入ります。それに何よりも平和です。これは私が夢見た完璧な世界です。将来は、自分自身が満足できる仕事につきたいと思っています。何かに挑戦できる仕事がいいです。

FUNAKI, Kaitu'u
フナキ カイツ
［トンガ］

APUを選んだ理由は、全く新しい大学であること、施設や素晴らしい環境、そして何よりここがベストだと思ったからです。得られるだけの知識や技術を吸収して、国に戻りその知識を具体的に役立てたいです。将来は人材育成の仕事がしたいです。コンピュータの修士号はすでに持っていますので、ここではほかのことを学びたいです。また、できればアメフトかラグビーもしたいです。



KARRO, Marion
カッロ マリオン
［エストニア］

初めてAPUのことを知った時、勉強するためになんて最適な場所なのだろうと思いました。私は以前からマネジメントに興味があったからです。ヨーロッパでAPUのような大学をみつけることは難しいことです。将来は、アジア太平洋地域と自国の掛け橋となる仕事をしたいと思っています。サークルはインド舞踊のクラブに入りたいです。また、ボランティア活動をして別府市民の人々とも親しくなりたいです。

SOLDATOVA, Elena A.
ソルダトヴァ エレーナ
［ロシア］

以前いた大学でAPUのことを知りました。その大学で、日本の経済や日本語の勉強をしていました。日本語をもっと勉強したくてAPUに来ました。ここで経営の勉強をして、将来は経済学者か通訳になりたいです。自分で起業することも考えています。APUは建物が新しく自然が素晴らしいです。また、異なった国々から集まってきた人たちと話すことは楽しく、日本語だけでなく英語やその他の言語を知ることができます。

TAMAKI Yoshitaka
玉木 慶貴
［日本］

高校二年の時にAPU開学を知りました。国際社会でやっていける教育を受けたいと思っていたので、大学案内のパンフレットで教学内容を知った時は、「ここしかないと」思い、マネジメント学部に入学しました。グローバルな環境のなかで、しっかり刺激を受けたいと思っています。

PERERA, D. A. S. C.
ペレーラ サジタ
［スリランカ］

両親は私に日本で教育を受けさせたいと願っていましたし、私自身子供のころから日本に来ることが夢でした。APUで学ぶことは私にとって大きなチャンスであり、幸運が舞い込んできた思いです。今は、毎日がとてもエキサイティングです。マルチカルチュラル社会という素晴らしい環境のなかで勉強し、卒業後は自分の国を助けたいと思います。

SINTHIP Nuangchamnong
スィンティップ ヌアンズアンノン
［タイ］

将来の希望はビジネス、ソーシャルマネジメント、財務関係の仕事につくことです。キャンパスにはハイテクな設備があり、いろんな国から来た人々とそれぞれの国の話をできる環境が楽しいです。入学式後の在校生の歓迎行事は私の国とは全く異なる歓迎方法でおもしろかったです。

「アジア太平洋地域理解」

APUでは、大学の理念を学生一人ひとりの中に根付かせ、国際社会で活躍しうる能力を持つ学生を育てるため、低回生時から、学生構成・教員構成における国際的環境を異文化間コミュニケーションやアジア太平洋地域の理解に結び付けていくことを重視しています。

そのために、一回生から四回生まで一貫した少人数制演習（ゼミナール）を設けており、その中心となる科目が一回生では「アジア太平洋地域理解」です。

「アジア太平洋地域理解」では、①国際学生と国内学生がともに学びあうなかで相互の理解を図ること、②「アジア太平洋地域における企業」（アジア太平洋学部）または「アジア太平洋地域における社会」（アジア太平洋マネジメント学部）についてのトピックを学び、アジア太平洋地域への関心を高め、基礎的な知識を身につけること、③調査・分析・レポート作成・発表・討論など大学での学習方法を身につけることを目標としています。共通のテーマは設定していますが、各クラスの担当教員が創意工夫をこらした授業を行っています。

今回、アジア太平洋学部のマニ教授とアジア太平洋マネジメント学部の横山研治教授にお話をうかがいました。

アジア太平洋地域理解（社会）

MANI, A. 教授
マニ エー

全員が発言する授業

春セメスターのクラスは、学生が二十人で日本人学生と国際学生が約半数ずつでした。学生の英語力にばらつきがありましたので、できるだけテキストに沿って授業を進めました。テキストは日本語と英語で書かれているため、私が英語で説明しても、テキストを見れば何を言っているかがほぼ理解できていたようです。テキストを使う以外は、ディスカッションやアジア太平洋地域の多様な文化を扱う小さなプロジェクトを行いました。学生をグループに分け、グループ毎に発表する形式です。学生たちは図書館に行って、書物やインターネットで調べ、調査結果をまとめて発表を行いました。これまで知らなかったことに学生たちはたいへん興味を持ち、意欲的にプロジェクトに取り組んでいました。クラスはフレンドリーな雰囲気で、学生たちはよく話すし、リラックスしていて、全体的に満足しているようでした。教室内での私の方針は、全員に発言させるということです。この授業では、発言しなければ何も学ぶことができません。おとなしい学生に対しては、名前を呼びながら何度も質問します。最初は驚いていたようでしたが、すぐに慣れて、名前を呼ばなくても話せるようになりました。こういった学生も卒業するまでには自分の意見をはっきり述べられるようになると思います。ゼミのクラスでは、教員がただ講義をすればよい、というものではありません。ゆっくりと、しかし確実に学生と考えを共有していくべきだと考えています。

日本人学生と国際学生の共同作業から真の対話が生まれる

春と秋では、授業の方法を少し変えています。一年たったところで、どちらが良いか比較するつもりです。秋セメスターでは、小グループで協力しながら作業を進めることに重点を置いています。まず、十四回ある授業のうち、六回は「組織と環境」「ツーリズムと環境」「アジア太平洋における情報メディア」などについて講義を行います。英語のレベルは高くなると学生には言ってありますが、インド、スリランカ、韓国、中国、タイ、ベトナムなどから来ている今度のクラスの学生は日本人学生も含めて、かなり高い英語力を持っています。七回目の授業からは、学生を三人からなる七つのグループに分け、それぞれ一つのトピックを選択させてそれについて調査し、クラス内で発表させる予定です。グループは必ず日本人学生と国際学生の混成にしています。それにより、日本語、英語それぞれの言語能力が向上するはずだからです。学生は講義を聞くだけでなく、小グループで協力しあいながらプロジェクトを完成させ、発表して他のグループと意見を交換し、さらに完成したものをペーパーにまとめるというプロセスを学ぶことになります。学生たちはいかに効果的に情報を収集するかだけでなく、どのよ

うにオーガナイズして他人にプレゼンテーションを行うか、さらに他人が読んで理解できるように自分たちの意見を整理するにはどうすればよいのかについて話し合いながら作業を進める必要があります。そのため互いをよく知るようになり、すばらしいチームワークが生まれると信じています。このプロセスで、学生たちのアジア太平洋に関する意識を高め、同時に日本人学生と国際学生の対話が生まれます。個人で学習する以上のよい結果が得られると考えています。

学生の内にある可能性に気付かせることが目標

私のティーチング・スタイルは次の通りです。まずトピックを導入し、学生をグループに分けて調査させます。最初は学生たちもその方法について迷うこともあるかもしれないと考え、私はコンサルテーション・アワーを設定しています。その際、もし学生に「質問があればいつでも私の研究室に来ていいですよ」と言えば誰も来ないでしょう。ですから「この時間がコンサルテーション・アワーなので来なさい」と言うようにしています。学生が来るとまず、これまでにしたことを尋ね、何もしていない、何をしていいかわからない、という状況であれば「こうしてはどうか」という具体的なアドバイスを与えます。一度で満足できなければ、ある程度の日数をおいて再度来るように言います。発表までに、良くできるグループで一回、自信のなさそうなグループで最低三回は来させるようにしています。こうして学生たちは自信を深めていき、発表が終わってペーパーにまとめる段階になると、何をすべきかがわかり、独り立ちできるようになっているのです。

つまり、私のスタイルは学生一人ひとりの内にある可能性に気付かせることを目標としています。一回生のときはともかく、上回生になるにつれ、自立しなければなりません。このセメスターが終わるころには、学生たちはかなり自立しているでしょう。

この授業の真の目的を理解して

全体としては、知識の収集・認識・共有の仕方を学んでほしいと思っています。グループになることで友情は育まれますし、文化の違いを学ぶこともできると考えています。たとえば、日本人が相手の目を見て話さないことをアメリカ人はおかしいと感じるかもしれませんが、日本人と一緒に過ごすことで、それが日本の文化だと理解できるようになるのです。いつも私は学生に言うのですが、この科目は思想を学ぶことや試験のために勉強することを目的にはしていません。ほかの科目と異質なのです。そのことにまだ気付いていない学生もなかにはいます。

ＡＰＵの学生は将来、英語と日本語の両方で意見が言えるようにならなければなりません。また、アジア太平洋地域のことも理解できなければなりません。真剣に取り組む学生は、大学が掲げるこれらの目標を理解できるようになるでしょう。卒業してから、このクラスがリラックスしながら学び、応用し、理解することを目的とした貴重な授業であったことに気付くでしょう。

アジア太平洋地域理解（企業）

横山 研治 教授
よこやま　けんじ

まずは「学びのスタイルの習得」を目指す

この授業を担当するにあたって、「学問的な発表方法を身につける」「英語の授業についていける力をつける」「情報ネットワークを学びに生かす」の三点を到達目標として設定しました。

クラスは二十人で、日本人と国際学生の各十人です。授業ではまず、学生各人が、自己紹介と出身地域に関する発表を約二十分程度行いました。基本的には発表は英語、日本人の学生も英語で発表しましたが、特に問題はなかったです。十八、十九歳の学生が、英語で内容のある発表をすることは大変なことなので、そういう意味では大成功だと思っています。

ほとんどの学生がコンピュータを使いますので、ウェブサイトで情報を探して、そこに使われている英文を引用して上手に発表する学生もいます。もちろん、一から原稿を作成している学生も大勢います。全員がパワーポイントを使ってプレゼンテーションをしています。おもしろい発想やオリジナリティのある内容の場合は、ディスカッションも活発になります。しかし、英語で質疑応答を行い内容を深めていくということは並大抵のことではありません。最初は、なかなか深いディスカッションまでは到達できません

でしたが、この半年間の充実した学習の効果で、後期はさらに期待できると思っています。

妥協をせずに

この春セメスターのあいだに、発表は一人三回ずつ行いました。内容的にも求めるものがついつい厳しくなってしまい、一つの発表に数週間の準備がかかるレベルのものをと期待していましたが、学生たちの発表内容はその思いに違わぬものでした。上位のレベル、特に国際学生のなかには相当優れた学生がいます。教員としては高いレベルにあわせて指導していくことが理想です。しんどいところもありますが、教員が妥協してはいけないと思っています。この半年、その姿勢を貫いてきたつもりです。

「違い」が大きな進歩を生み出す

十月からはじまる秋セメスターでは、新しいクラス編成が行われます。十月入学者が入ってきて、全く新たに始まります。これはある意味非常に難しいことです。言語能力の違いなど、春に入学した学生と入学したばかりの学生の間には進度の違いが生じます。しかし、実はこの進度の違いが進歩の源になるわけです。お互いが違うからこそ、切磋琢磨し、その差を埋めようと努力していけばお互いが伸びることもできるわけです。そんなに簡単なことではないでしょうが、そうなるように指導していきたいと思っています。言語のレベルや出身国・地域を統一したクラスを編成すればという意見もなかにはありますが、それではおもしろくないし、APUとしての意味がない。違いがあるからこそ、おもしろいと思っています。

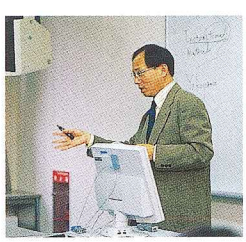
誉めて育てる

これまで他の大学でも教えてきましたが、このような授業は全く初めてですから、自尊心も自信もがたがたになってしまった時もありました。言語能力にそれぞれ違いがあるので、みんなに理解させることは非常に難しいことです。最近ではマラソンの高橋尚子選手と小出監督の例がありますが、春セメスターで私が課題にしていたのは「誉める」ということでした。はじめの一カ月は誉めていましたが、根がそういう人間ではないので、気付いたら注文ばかりつけていました。ついつい要求が高くなってしまう。しかし、秋セメスターではもう一度誉めようと思っています。誉めると妥協とは違いますよね。妥協する先生は「人気」があるが、尊敬はしにくい。厳しくすると確実に煙たがられますが、妥協せず、誉めながらも厳しくやっていきたいと思っています。

教師の役割を自覚して

いろいろな大学で学生を教えてきた経験からすると、APUの学生は総じて優秀だと思います。甘えがなく、きちんとした発表をしようとします。内容にもおもしろいものがあります。

この大学は新しい、そして多くのいい制度があります。しかし、それを運営していくのは教員であり、学生です。特に教員です。やはり教育機関は教員です。教員一人一人が制度を正しく理解して、自覚を持っていかに取り組んでいくかにかかっています。良い環境を与えられたのだからそれだけのことをしなくては、と意気に感じ、燃えています。



Le Thi Lam Hao
(レ ティ ラム ハオ)
●ベトナム

この授業では、他の人の発表を聞くことによって、ベトナムだけでなく日本や他の国の経済や政治について知ることができ、非常に興味深かったです。私自身、発表は前期に三回行いました。APUに入学するまではプレゼンテーションの方法がわかりませんでしたが、今はみんなの前で発表することが好きになりました。友達からパワーポイントの使い方を教えてもらい、図書館やAPハウスのコンピュータを使って資料を作成しました。

APUに入る前は、ベトナムで医大を卒業し病院で働いたこともありましたが、その後、転職して貿易会社で働きました。ハノイにある日本の貿易会社の事務所に勤めていたことがあり、日本に興味を持ちました。この大学は、日本語とマネジメント、そして英語も学ぶことができるので選びました。卒業したら、また貿易の仕事をするつもりです。貿易の仕事は、世界の情勢を知ることができるからです。

©共通テキスト「アジア太平洋」の目次

第1部 アジア太平洋の社会と文化
第1章　生態
第2章　アジア太平洋の言語と文化
第3章　エスニシティ
第4章　人権

第2部 アジア太平洋の環境・観光・情報
第5章　都市と環境
第6章　アジア太平洋の観光
第7章　アジア太平洋の情報メディア

第3部 アジア太平洋の市場
第8章　アジア太平洋の経済
第9章　アジアの金融市場
第10章　東アジアのロジスティクス
第11章　アジアの繊維産業
第12章　イスラムの市場

第4部 アジア太平洋のマネジメント
第13章　アセアンの生産ネットワーク
第14章　アジア太平洋のマーケティング
第15章　日本企業の発展
第16章　日本型経営の未来

「日本語学習」

「日本語という言語をはじめて本格的に学ぶ国際学生の言語能力が、日本語による大学授業を理解できるレベルに到達すること」を目標に、APUでは日本語の一貫教育プログラムを整えました。

正課授業では、「学術目的の言語習得」に重点をおき、二年間で日常生活に必要とされる日本語に加え、大学で必要とされる学術日本語まで学ぶことになっています。そのためにAPUでは、専門教育科目と連携した内容の独自の教科書も開発してきました。

今回は、その教科書の開発責任者である山本富美子教授にお話をうかがいました。

山本 富美子 教授
やまもと ふみこ

日本語の一貫教育プログラムがAPUにはあります

私が担当しているのは、中級段階から上級段階にかけての授業で、日本語教育のなかでは、一番やりがいのあるところと言えるかもしれません。

日本の大学ではこれまで、この段階の学生を教える正規の日本語教育の科目が設定されておらず、民間の日本語学校で学んだ日本語上級者が大学に入学するというのが通例でした。大学入学時点での高い日本語能力を求めるため、諸外国の高校を卒業した後、一定の日本語学習期間を持たない限り、日本の大学へ留学することは非常に困難なことでした。APUでは、これまで日本への留学の壁のひとつとなっていた「入学時の日本語能力」という高いハードルを取り除き、英語での受験を可能としました。入学時点での日本語能力は不可欠なものではなくなったのです。

この大学では日本語が上級の学生はもちろん、初級・中級の学生を受け入れることができる教育カリキュラムを設定しています。日本語入門から学術日本語までを大学の正課で学ぶことができるという、日本語の一貫教育プログラムです。

【立命館アジア太平洋大学日本語教育プログラムの特徴】

APU

◆日本語入門レベルから学術日本語レベルまで大学の正課で一貫教育　◆コミュニケーション能力重視
◆「読む」「聞く」「話す」「書く」4技能を総合的に養成　◆学術日本語能力の養成

<正課>　＊言語科目1単位＝95分×15週　＊専門科目2単位＝95分×15週

日本語科目	単位数（時間/週）	対象者	到達目標（日本語能力試験）	特記事項
「日本語入門」 「日本語Ⅰ」	8（95分×8/週）	日本語初心者	3級240以上	・日本語学習に専念できる体制
「日本語Ⅰ」	4（95分×4/週）	初級		
「日本語Ⅱ」	4（95分×4/週）	初中級	3級320以上 2級240以上	・社会科学系一般教養のテーマ ・専門語彙　・表現の導入
「日本語Ⅲ」	4（95分×4/週）	中級～中上級	2級280以上 1級240以上	「付接モデル」 ・専門講義理解のための方策を修得 ・大学生に必要な日本語能力を修得 （専門講義2単位につき日本語4単位）
「日本語Ⅳ」	4（95分×4/週）	上級～超上級	1級320以上	
「通訳Ⅰ」 「通訳Ⅱ」 「ビジネス」 「メディア」 「日本語教育技術」	各2単位（選択）	超上級	1級360以上	

<日本語環境サポート>
オフィス・アワー、日本語情報システム、ピアシステム、日本語ラウンジ

これまでの日本語教育をさらに発展させて

日本語入門からはじめた学生は、六カ月間の初級教育で日本語の基本文法・日常会話を学んだ後に、中級段階にすすむわけです。私は、この中級教育の段階で、日本語能力を伸ばしながら、日本人学生なら高校までに勉強している内容、また大学一・二回生の教養課程で学ぶ内容も学べる、この二つをかね合わせた教育ができないかということを考えました。これまでの中級・上級段階の日本語教育では、一般教養や、大学における専門課程への橋渡し的な教育が不十分だったのではないかと思ったからです。

以前私は、上級段階の国際学生に現代社会や社会学入門を教えていたので、その内容のかなりの部分をベースにしつつ、あわせてＡＰＵ開学までの準備期間中に専門科目担当の先生方にアンケートをとり、専門科目を学ぶ際に必要となる背景的な知識や前提知識をうかがいました。そして、社会科学系の専門語彙とはどういうものかを調査し、集計したものを基礎として社会科学系で学ぶ国際学生のための、独自の日本語教育の教科書を作成したのです。

独自の日本語教育テキストが大きな効果を発揮

四月のＡＰＵ開学にどうにか間に合わせようと教科書を急いで作成しました。おかげさまで、出版社に認められ、十一月には出版されることになりました。私がその教科書で意図したのは、文系・社会科学系の学生が必要とする一般教養的な知識を網羅することです。さきほども申し上げましたアンケートから十四のテーマを選び、各課に「読む」「聞く」「話す」「書く」の四技能すべての練習課題を入れました。学生もこちらも初めての試みだったのですが、教員の熱意は伝わるもので、この半年間、学生たちは一生懸命勉強したと思います。日本語能力試験二級程度であった学生が二級の合格点を突破し、日本語Ⅱの到達目標をクリアする。さらに次の段階である日本語Ⅲの到達目標を突破した学生が全体の半数に及びました。「私たちすごいでしょ。教科書もぼろぼろになって、みんなにびっくりされるんだよ」と、私に語りかけてきます。

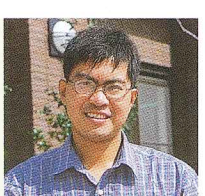
初級レベルであったインドネシアのある学生が、春セメスターの評価が「B」だったことにクレームをつけてきました。本人としては、非常がんばっただけに納得がいかなかったようでした。七月の時点では不十分なところがあったけれど、復習すれば十二月の日本語能力試験では一級に達するからと説明しましたが、七月以降随分勉強したようで九月には難しい日本語も流暢に読んで話せるようになっていて、「A+」（最高の評価）をつけてもいいくらい上達していました。

もどかしさが消えるまで

長年の構想の結実ともいえる独自の教科書が完成し、その教科書で懸命に学び、その結果として日本語が急速に上達していく学生たちをみていると教員冥利に尽きるものがあります。このような教科書を作ろう思ったのは、以前教えていたところで、こんなことが頻繁にあったからです。議論をしても日本人学生は日本の過去の歴史を知らない、議論にならないと言って、韓国や中国、インドネシアなどから来た学生が涙ぐんでしまうんです。しかし、自分はそれを十分に相手に説明する言葉、表現力を持っていない。でも、何故あなたは知らないんだ、という憤りや自分の思いをどうにか伝えたい。

私は、日本語を教えるのなら彼らのそのもどかしさを取り除き、日本語で議論できるくらいのものを与えないといけないという気持ちになりました。それは一方的に講義するだけでは絶対身につかない。学生たちが、読んで、話して、聞いて、書くということを自分でしなければ身につかないと痛感し、よし、つくろうと決めました。ＡＰＵがいいきっかけになりました。

今後は、授業に日本人学生にも参加してもらって、一緒に議論する機会をもっていきたいです。日本人学生もきっかけさえあれば、一緒にやりたいという気持ちが本当はすごく強いんです。ＡＰＵならそれが実現できると思っています。



Aung Lin Htin
（アウン・リン・ティン）
●ミャンマー

ＡＰＵに入学する前に京都で一年間日本語を勉強しました。入学した頃は日本語Ⅱのレベルでした。自分で判断するのは難しいですが、以前より随分コミュニケーションがとれるようになったと思います。

京都での日本語学習は、文法や会話ばかりでしたが、ＡＰＵでの日本語学習で、文章が読めるようになりました。先生が作成された教科書では、日本語だけでなく、さまざまな勉強ができました。国際結婚や日本での生活費について年齢別に調査するなど、日本語を用いて社会や経済について調査する方法も教わり、各自がその結果を日本語で発表しました。そのなかで日本語力がついたと思います。

できれば日本人のように話せて書けるようになりたいです。特に漢字は読むことはできても、書くことは本当に難しいです。

日本語以外では、「国際平和と社会」の授業がおもしろかったです。はっきり決めてはいませんが、将来は、できれば国に帰って政治の仕事につきたいと思っています。

2000年度　春セメスター優秀学生奨励金受給者決定

ＡＰＵでは、学業、自主活動、進路・就職に関わる試験、国際交流などで、より高い目標に挑戦する学生を励まし、その成果を顕彰する制度を設けています。

そのひとつである二〇〇〇年度春セメスターの「優秀学生奨励金」受給者ならびに成績優秀表彰者がこのたび決定し、十月十七日、表彰式を執り行いました。

「優秀学生奨励金」は、各学部、各回生における当該セメスター期の学業成績が、特段に優秀な者を対象としています。成績優秀者には、学長賞として表彰するとともに、金賞（一位）受賞者に十万円、銀賞（二位）受賞者に五万円、銅賞（三位）受賞に三万円が、優秀学生奨励金として給付されました。

また、各賞に続く各学部上位十名の成績優秀者を学部長賞として表彰しました。

●アジア太平洋学部

金　賞　加藤　徹生（日本）
CHOWDHURY, Shradh（インド）

銅　賞　鈴木　大海（日本）

●アジア太平洋マネジメント学部

金　賞　GADICHO, Wilbur J（フィリピン）

銀　賞　張田　容子（日本）
LU Qian Ni（中国）
SETIAWAN, Rifky（インドネシア）

金賞

アジア太平洋学部
加藤 徹生
かとう　てつお
（日本）

表彰されたことは本当にうれしいです。入学試験の際もその成績を評価していただき、ＡＰＵ特別奨学金をいただきました。学習や課外活動に取り組むうえで大きな励みとなるので、このような表彰制度はもっと大きくしていくべきだと思います。

一日に四時間程度は勉強しています。大学に入ったからには、勉強するのは当然のことだと思っています。授業のなかでは福井先生のアカデミックレベルの高さに満足しています。

課外活動では、サークルの連合を作ることに時間を費やしています。また、教学・学生生活懇談会のスタッフもしていますし、とても忙しい毎日です。国際学生と日本人学生の意識には、いろいろな意味で大きな違いがありますが、それぞれ半々の割合というこの環境を生かし、もっと理解しあい、魅力的なＡＰＵを一緒につくっていきたいと思っています。

全体的なアカデミックなレベルをもっと上げていくためにも、今以上に学生と教員のコミュニケーションをとっていきたいと思っています。

金賞

アジア太平洋マネジメント学部
GADICHO, Wilbur J
ガディチョ　ウィルバー
（フィリピン）

一生懸命勉強しましたのでこの結果には満足しています。授業は、すべて興味深かったのですが、特に「現代の科学技術」は大変素晴らしい内容でした。

私は、子供の頃から外国の国際大学で学ぶことを希望していました。すでにフィリピンにある大学で三年近く勉強していたのですが、ＡＰＵのことを知った時は、すぐにやめてＡＰＵに行こうと思いました。ＡＰＵに行くことが自分にとって大きなステップになると思い、迷いはありませんでした。

このあいだ教学・学生生活懇談会やリーダーズキャンプに参加して、これからの新しい目標を見つけました。それは、ＡＰＵにスチューデントカウンシルをつくることです。新しい大学ですから多くの課題もあります。今後は、勉強は勿論ですが、学生も一生懸命知恵を出し合ってＡＰＵをサポートしていきたいと思っています。そのことが、ＡＰＵの将来につながると考えているからです。

今回の受賞のことは両親にも報告しました。母は泣いていました。賞金は、貰いつづける限りフィリピンに送ります。

ＡＰＵの学費

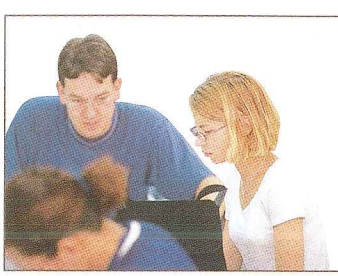
単位制授業料による合理的な学費システムを実現

ＡＰＵでは、アメリカの大学などで主に用いられている「単位制授業料」を採用しています。

●一年間の授業料は「固定授業料」と登録した単位数に応じて必要となる「単位制授業料」の二つで構成されます。これにより、受講する単位数（科目数）と授業料との関係がより明確になります。

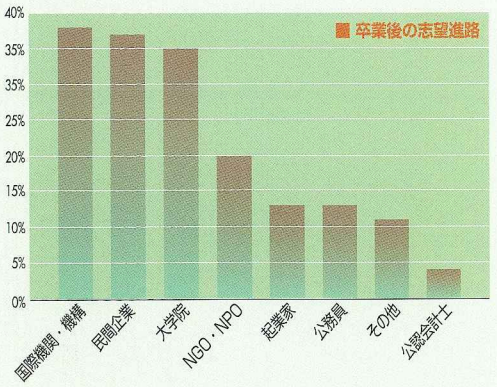
●ひとつひとつの授業と学費との結びつきが学生にもはっきりと理解できることから、学習意欲の向上にも役立ちます。

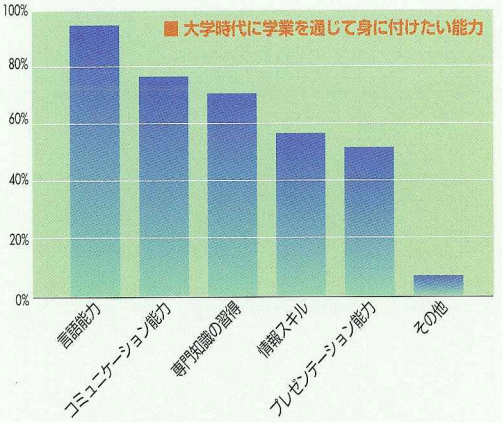
●一年間に支払う授業料の総額をある程度学生自身がコントロールできるので、課外講座（エクステンション講座等）を履修するかどうかなどを含め、経済面でも四年間の計画的な履修が可能になります。

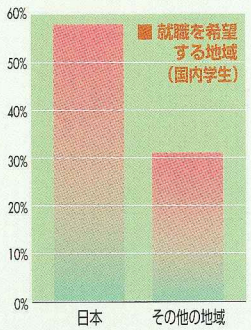


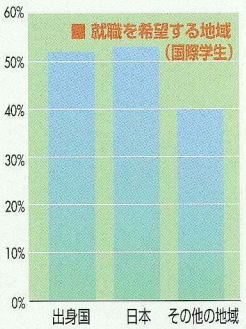
APU進路意識調査アンケート結果報告

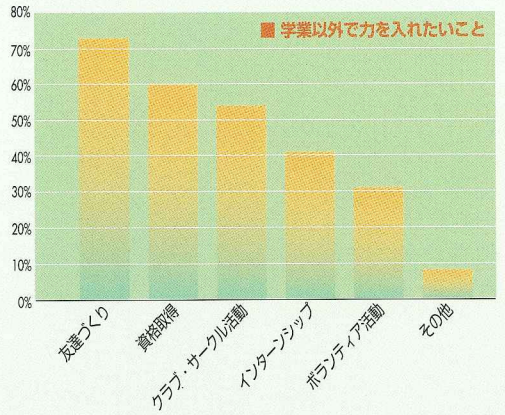
キャリア・オフィスでは、入学当初に全学生を対象とした、希望する進路や学びたい領域についての「進路意識調査アンケート」を実施しています。このアンケートをもとに、個々の学生の進路、学生生活に対する意識を掴み、進路や履修に関する指導・相談に活用します。また、すべての学生が入学段階から自分が取り組むべき課題を理解し、常に緊張感と目的意識をもった学生生活を送れるようにしています。左記は二〇〇〇年四月入学者の回答から抜粋したものです。











※回答は複数回答です。

★サークル紹介 「ENTREPRENEURS（アントレプレナーズ）」

われら起業家志望集団！ただいま猛スピードで準備中です。

http://www.apu.ac.jp/~yuzurog0/

研究棟の一階、ひろびろとしたスペースを陣取って、熱いディスカッションを行っているのは、アントレプレナーズの面々。

このサークルは、起業を志す者が共に学習し、刺激しあい、ビジネスにおける基本的スキルを身につけ、各々が将来における成功の土台を築き上げることを目的としています。現在三十五名が二つのグループ（起業班、知識班）に分かれ活動しています。

起業班では起業するために実際に活動し、その過程での問題点についてディスカッションを行い、経験や知識を習得していきます。知識班では、ビジネス上で必要とされる知識について、プレゼンテーションやディスカッションを行い、幅広く学びます。サークル全体としては講演会の企画も行なっています。

起業班が力を入れて進めている企画の一つは、「たんぽぽ語学塾」の開校です。小学生低学年を対象に英会話塾、そして観光業の方を中心にビジネスに必要な中国語と韓国語の塾を開くことによって、APU国際学生の経済的援助と別府地域への支援を行います。また塾の運営により起業経営に必要な能力を学び体験します。

知識班は冊子を発行し、企業アイデアを得るための知識、また学生の将来の動機づけに役立つ情報を発信して行く予定です。さらに、大分県下の大学をはじめに、日本全国にベンチャーネットワークを作り、情報交換を行うことも計画しています。

それぞれが誇りを持って発言し活動している姿は、APUから大志を持った優秀な起業家を送りだす日が近いことを予感させました。

サークル一覧

体育系サークル	バスケットボールサークル
弓道	9（nine）スキー・スノボ
チアリーダー部	クリケット
バトミントン	学術・研究
硬式野球部	アントレプレナーズ
APU DOLPHINS（バスケット）	Stock Market Research
バレーボール	UNAP（国連サークル）
ゴルフ部	ディベートサークル
テニス部	S cube
卓球部	Chatting
水泳部	会計研究会
柔道部	文化・芸術
INTORAS FC	プロレス同好会
キックボクシング	Running 9（ロックバンド）
剣道	オーケストラ「アルモニコ」
ホッケー	茶道部
アメリカンフットボール	テキサス（ジャズ）
パラグライダー部	SIAAPS
ダブルダッチ	ACTORS（演劇）
陸上競技部	Global Village（料理）
ダンスサークル	書道部
女子長距離陸上部	APU神楽社
少林寺拳法	軽音楽部
古武道	APU放送局
テコンド	箏曲部
D. O. H. C.（ダンス）	GEISYAガールズ（日本舞踊）
APU空手同好会	おとごころ
フットサル	親睦団体
ラグビー部	APUエンジョイ会
ソフトテニス	何でもスポーツ
ヨット部	

皆様のご協力に心から御礼申し上げます。「APU国際学生奨学金」を有効に活用し、大いに学んでいます。

おかげさまで、APU初年度におきましては、最も重要でかつ困難な課題であった学生の半数（一学年四〇〇名）を国際学生として迎えるという目標を達成することが出来ました。定員を上回る国際学生を迎える最大の力となりましたのは、皆様のご協力により給費奨学金制度として「APU国際学生奨学金」を準備できたことです。ここでは、「APU国際学生奨学金」の本年度の執行等に関しまして、ご報告します。

1 申込状況（二〇〇〇年九月三十日現在）

●アドバイザリー・コミッティ、サポーティング・グループをはじめとする企業・個人からの申込

三百六十八社・人
三十七億八千万円

●立命館教職員からの申込

八百九十二人
九千万円

合計　三十八億七千万円

2 入金状況（二〇〇〇年三月三十一日現在）

九億五千万円

3 奨学金の種類（二〇〇〇年度）

①国際学生奨学金A
授業料減免＋年間百万円（生活費）
一、七六二、三〇〇円

②国際学生奨学金B
授業料減免
七六二、三〇〇円

③国際学生奨学金C
授業料の一部減免
三八一、一五〇円

[注]① 授業料のうち、三〇%は大学が減免いたします。A・B奨学金受給者は授業料全額、C奨学金受給者は授業料の六五%が減免となります。
② 授業料は毎年改定いたしますので、授業料減免として執行する奨学金額も変更となります。

4 奨学金受給者の選考方法

APUでは、国際学生には、入学願書とともに希望者には奨学制度の申込書を同時に提出させるようにしています。日本政府が留学生の受け入れの増加を目指し推奨している、渡日前に入学試験の合否及び奨学金の受給を決定するという制度を、皆様のご支援によりAPUでは実現することができました。

※奨学金は、①世界中の多くの国・地域から国際学生を迎えるというAPUの入学政策を具体化することを基本にし、②高校および各国大学入学統一試験等の学業成績を重視し、また経済状況も勘案しつつ、優秀者の中から選考を行い決定しました。

5 奨学金の執行と今後の予定

●四月に入学した学生の受給者

A十七名、B六十五名、C五十五名、合計　百三十七名

●十月に入学した学生の受給予定者

A二十二名、B八十三名、C四十五名、合計　百五十名

●二〇〇〇年度

合計　二百八十七名
（全国際学生数の六八%）

●本年度入学者必要奨学金予定額

一六〇、八〇七千円

6 奨学金の受け入れ、支給について

①ご入金いただきました奨学金は、学校法人立命館がお預かりし、日本私立学校振興・共済事業団へ送金します。免税手続きに必要な受領書が事業団から発行され次第、お手元にお届けさせていただいております。

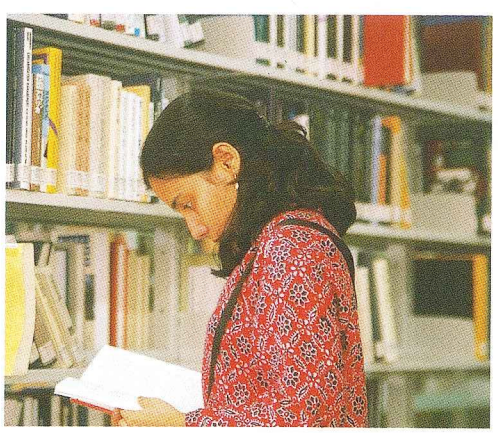
②企業様のご都合に柔軟に対応させていただいた結果、計画書は多様な年数（十年、八年、六年以下五種類、計八種類）と多様な年額（一億円、五千万円、三千万円、二千万円、千五百万円、一千万円、以下十八種類計二十四種類）にわたっています。

◆「冠奨学金」をご指定なされる場合は、別途事務局がご相談にあがらせていただきます。

③ご助言をいただきました「年額支給額の抑制」については、A奨学金の受給予定額年二百五十万円を上記のように変更し、その差額は繰り延べ、将来一人でも多くの国際学生に給付できるようにいたしました。

④「現金執行は最小限度に」というご助言にもとづき、学費は奨学金から振替執行し、本人の手元を経由しない形態といたしました。また、A奨学金受給者の生活費の支給は、年二回支給の予定を変更し、一回の支給金額を抑えた本人口座への月毎の振り込みといたしました。

⑤給付期間は、最短修業年限（基本は四年間）としています。
ただし、在学期間中、セメスター毎に継続審査を行い、奨学金継続・注意喚起・警告・取消を決定します。



注意喚起・警告を受けた者は、次セメスター終了時までに成績の改善が認められない場合は、奨学金を取り消す場合があります。

［注意喚起］
修得単位が標準修得単位の四分の三以下の者、評価内容が著しく不振の者。

［警告］
修得単位は標準修得単位の三分の二以下の者、評価内容が著しく不振の者。

［取消］
学籍を失った者、休学した者（復学の場合は復活することもある）。
継続審査により連続して警告を受けた者、懲戒処分を受けた者。

7 今後の見通し

①現在の入金金額は、開学後三年間の必要相当額になっております。年度毎の執行を確実に行い、適切な運用に努めます。

②十年で財政自立を目指します。それまでにはなお奨学金が必要です。今後、国際的ネットワークやサポーティング・グループのネットワークを広げて参ります。

③皆様方のご理解ご支援が大きな支えとなり、現在、政府の留学生支援策は強化の方向で検討いただいています。今秋にはODA資金の活用により、ラオスから六名の学生を迎えることができました。今後も、公的資金の確保ができるよう、一層取り組みを強めます。

Nguyen Mai Thi Thanh
ネエン マイ
■ベトナム

APU開学の精神に賛意を示し、国際学生の育成に貢献して下さっている企業や個人の皆様のご厚意に対して、深い感謝の気持ちを表したくこの手紙を書いています。

私はアジア太平洋地域における発展途上国の一つであるベトナム出身の学生です。ベトナムの未来を担う次世代の一人として、母国の発展が地域全体の発展につながることを期待しています。また、その実現に向けて、自らの知力を捧げることが私の使命だと考えています。国の発展は主に、若い世代の努力いかんにかかっています。高度な能力に加えて最新の知識を身につけている若者こそが、国の発展の礎となる「資源」なのです。そういった観点から、勉学に励み、新しい知識に触れ、社会に貢献できる人間となれるようにベストを尽くしたいと思っています。私が日本のこのような素晴らしい大学で勉強することを可能としてくれるAPU国際学生奨学金Aをもらえて光栄です。ここでは新鮮かつ様々な経験をしています。世界各国から集まっている先生や友達から新しい知識を習得し、さらにホームステイなどを通じて別府市民や日本人の友達とコミュニケーションをとり、日本と日本文化について色々なこと学んできました。APUでの勉強を続け、更に成長し、母国の重要課題である経済的発展へ有意義な貢献ができるようにがんばりたいと思っています。

最後に今一度御礼を申し上げます。

Ankhbold Bayanmunkh
アンクボールド バヤンムンク
■モンゴル

皆様こんにちは。私は、まず始めに、私たちの奨学金基金にご寄付頂いた全ての親切な皆様方に対して、APUの全ての奨学金受給者を代表して感謝申し上げたいと思います。

私の名前は、アンクボールド バヤンムンクです。モンゴルの出身です。私は、モンゴル国立大学で3年間学んだのち、今年4月にAPUに入学しました。今は、アジア太平洋マネジメント学部で勉強しています。日本で勉強をすることは、幼い頃からの私の夢でした。残念なことにこれまでは、金銭的な問題のために私の夢は実現できずにいました。しかし今は、このA奨学金の受給者となったことで、この大学の第一期生のひとりとして日本に来れたことを大変うれしく思っています。

私は、これが多くの日本の企業・個人の皆様方によるご厚意のおかげであることを理解し、皆様方の寛大さにいつも感謝致しております。私の考えでは、こうした動きは、世界、特にアジア地域の平和と発展に指導的な役割を果たす日本のよき行動例だと思っています。

私たちA奨学金の全ての受給者は、他の学生と比較するとAPUで勉強しやすい機会を与えられています。ですから、私は、A奨学金受給者として他の学生の良い模範となれるように一生懸命に勉強しなければならないと考えています。そして、モンゴルの発展に最善を尽くし、モンゴルと日本の両国間の協力関係を拡大していくように努めていきたいと思います。また皆様方のご期待に添えるように努力します。皆様方のビジネスのご成功とご多幸をお祈り申し上げます。

どうもありがとうございました。

Phanida Nicharot
パニーダ ニチャロット
■タイ

私はタイから来たPhanida Nicharotです。アジア太平洋マネジメントを専攻しています。私は高校を優秀な成績で卒業し、この度タイ国王子妃より王室奨学金をもらいました。一生に一回の名誉でした。しかし今までの人生の中で最も光栄に思っているものの一つは、私に新たな未来を与えてくれるこのAPU奨学金の受給です。APUの学費はタイのどの大学よりはるかに高く、私が奨学金を受給していなければ私の親には到底払えないのです。

4月に入学してからわずかの間しか経っていませんが、大学の最新の設備や素晴らしいキャンパス、素晴らしい多文化環境、親切な職員、友情のある人々、興味深い伝統文化など、色々なものに感動しています。今年開学したばかりのAPUは、将来には世界有数の名門大学の一つとして数えられるようになると私は確信しています。ここで勉強していることを誇りに思っています。1年目の春セメスターを終えましたが、まだ先が長いです。今まで色々なことを学び、日本語も確実に上達しています。春セメスターはほとんどの科目がとても面白く、秋セメスターもそうなるだろうと期待しています。私は様々な課外活動にも関わっています。株研究サークルのリーダーを務めるとともに、女性サッカーの新サークルを作ろうとしています。また、5月22～25日に行われたタイの言語ウイークの際にもイベントスタッフや多くの友人のサポートを得てリーダーとして務め、大成功をおさめることができました。現在は、学生を代表する組織をつくる準備を進めているスタッフにも加わっています。これらの活動の趣旨とは、より良い大学を創造することです。必ず成功するとスタッフみんなが確信しています。

以上、私が春セメスター中にやったことを数件紹介しましたが、この新しい環境に慣れ、大学の動きをより理解できるようになったら、今より一層活躍の幅を広げることを約束します。私が皆様のご厚意にどれほど感謝しているか、皆様に直接お会いして御礼を申し上げることができないので、この手紙を通じてお伝えします。

APU設立の真の意味を生かすことができるよう力を尽くす決意です。このような素晴らしい機会を与えて下さって本当にありがとうございます。

開学祭

開学祭（交流ステージ）

開学祭（フリーマーケット）

学生と地域との交流はじまる

石垣小学校（音楽集会で民族舞踊を披露）

亀川小学校（国際理解教室）

亀川小学校（国際理解教室）

転換点となった「APU開学祭」

APUは、大分県民・別府市民の理解と協力なくしては誕生しえなかった大学であるとも言えます。開学前から、APUは大分県、別府市において「かく在りたい」という姿を『APUからの提案』を通じてPRを行うとともに、広範な人々と対話を重ねてきました。しかし、なにぶん完成年度で約二千人もの国際学生が人口十二万人のまちに居住するということは前代未聞のことでもあり、期待半分・不安半分で、とにかく「大学ができてみなければ」という方々も多かったのではないかと思います。このような県民・市民の意識が大きく動いたのは、やはり三万五千人の人々が参集した「開学祭」の取り組みでした。県民・市民とAPUの学生たちが、はじめて出会い交流した意義は極めて大きく、開学祭以後、県民・市民の不安や心配が、期待と積極的行動へと見事に転換していく様子を目の当たりにしました。

広がるホームステイ・ホームビジット

開学時三十件であったホストファミリーの登録件数は、五月の連休を経て六十件に増え、開学祭以後はさらに伸びて、現在は百六十一件になりました。別府市にとどまらず、その他の市町村からの申し込みが増えているのが最近の特徴です。これまでホームステイ・ホームビジットでお世話になった学生の数はのべ百三十名にもなります。家族の方々や学生の感想文からは双方の期待と緊張、感激が伝わってきます。国際学生の別府市内における本格的居住が始まる来春までには、大分県内で五百件の登録、さらに長期休暇を利用したホームステイのために全国の校友、京都・滋賀・北海道の教職員・市民にも登録を広げる取り組みを行いたいと考えています。

多様な交流内容

春セメスターにおいて、県民・市民から、キャンパスであるいは県下のあちらこちらで、APUの学生と交流したいという問い合わせが連日のようにあり、実際に具体化されたものは六十件にも及びました。また、APU学生の民族舞踊や料理を披露して欲しいという県内の祭り・イベントへの協力参加は二十件にものぼりました。

国際理解教室など学校教育への協力要請も増えはじめています。たとえば、キャンパスに最も近い亀川小学校では五年生三クラスを対象に七回におよぶ国際理解教室が開催されています。そこでは、APUで学ぶインド・中国・韓国の学生が自国の文化、歴史、地理、言葉などについて、毎回工夫を凝らした講座を行い好評を博しています。

交流した団体の方々からは、「APUの学

生さんは積極的でサービス精神も旺盛で、とても好感がもてます」といったお言葉をよく頂戴します。このように学生が積極的なのは、やはり学生たち一人ひとりが、APUの成り立ちをよく理解してくれているからだと考えています。

これほど地元の方々からの期待と歓迎を受け、次々と交流を生み出していった大学が、かつてあっただろうかと考えると、学生たちは本当に幸福なAPUでのスタートをきったといえると思います。

交流の質の向上をめざして

しかし、これからは現状に甘んじることなく『APUからの提案』にたちかえり、学生たちが自ら進んで、県民・市民の福祉、教育、環境の改善あるいは観光振興などに取り組むよう援助する必要性を痛感しています。つまり、交流を「異文化理解」という次元にとどめるのではなく、教育研究機関としての大学の役割にふさわしく、「学び」を通じた県民・市民との交流に高めることが重要であるということです。

開学からはじまりこの半年間、県民・市民との交流が与えてくれた豊富な示唆を生かしながら、今後のAPUの地域におけるありようについて学生たちと共に考えていきたいと思っています。

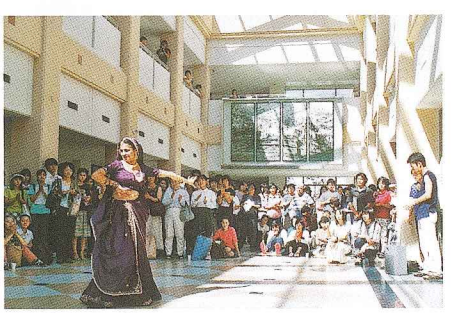
APUスチューデント・オフィス
課長　今村正治

インターンシップ（バラの生産・出荷）

亀川夏祭り

留学生無料ヘアカット

若宮ふれあい縁日


オープンキャンパス

■ ホストファミリー登録件数

別府市	74	庄内町	1
大分市	42	本耶馬渓町	1
日出町	11	安心院町	1
狭間町	4	臼杵市	1
豊後高田市	4	野津町	1
杵築市	3	直入町	1
湯布院町	3	APU職員	6
中津町	2	APU学生	4
宇佐市	2	計	161

● 別府市　岡田 純明さん

去る連休に、一週間のホームステイを受け入れました。素晴らしい彼女とぴったり息が合い、迎える方も感激の毎日で充実した日々を過ごすことができました。感動を与えてくれたことに深く感謝申し上げます。学生さんからの見事な礼状（右記参照）は、大分合同新聞の読者の声欄に近く掲載される予定です。一人でも多くの人が、ホストファミリーとして受け入れるきっかけになればと思い投稿しました。

中国・大連生まれ、長春（旧新京）育ちの小生が、残留孤児を迎え入れてくれた恩返しができればと思っています。今回のホームステイの成功をきっかけにAPUと深くかかわっていきたい所存です。（抜粋）

左から岡田さん、XU Li（シュリ）さん。

● 学生礼状　XU Li（シュ リ）［中国］

新緑が目にしみる季節になりました。近ごろ、ちょっと蒸し暑いですが、お父さん、お母さん、お変わりありませんか。私は今元気一杯勉強していますので、ご心配しないでください。

ホームステイの日は何かとお世話になりましたこと、まことにありがとうございました。中華料理や日本料理などをご馳走していただき、いちご狩り・阿蘇くじゅう花公園・滝・ビール工場の見学など、本当に楽しい日を過ごさせていただきました。特にお母さんの手作りのお料理の味は素晴らしく忘れられません。

生まれ育った国を離れて一人で日本で勉強するのは本当に寂しかったです。でも、ホームステイの日は私がまるで両親のそばに帰ったようでした。お父さんとお母さんのやさしさに泣きたいほど感激しました。

まもなく母の日になります。まずは、お母さんのご健康とお幸せを祈ります。

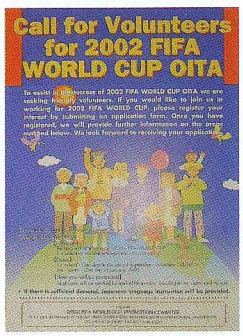
2000年5月

APU学生と地域との交流状況

4月 3日~30日	城島後楽園遊園地無料招待（学生・教職員）
4月 8日	別府つるりん通り商店街振興組合「ニュージーランド・ハウス」落成式へ留学生招待
4月13日	別府市食生活改善推進協議会主催「お花見交流会」へ留学生招待
4月18日	亀川浜田町・亀川中央町の主婦がインドからの留学生をホームパーティーへ招待
4月23日	全国植樹祭（大分）への留学生の参加
4月29日	亀川学生ネットワーク協議会初会合開催、留学生参加
4月29日~5月7日	GWホームステイ
5月 1日	サッカーJ2・大分トリニータサッカー観戦
5月13日	ヒッポファミリークラブとの交流、ホームステイに留学生招待
5月20日	APU開学祭開催、APUと県民・市民35000人が交流
5月20日~10月31日	別府市旅館組合連合会加盟施設による温泉入浴招待（学生・教職員）
5月24日	商工会議所青年部主催夕食パーティー
5月24日	ヒッポファミリークラブ パーティー&ホームステイ
5月25日	サッカーJ2・大分トリニータ公式戦への学生無料招待
5月28日	ソロプチミスト協会主催・宇佐神宮バスツアー
6月 3日	ワールドカップ2年前PR企画
6月 4日	別府留学生援護会主催・別府観光バスツアー
6月 5日	留学生無料ヘアカット
6月 8日	APU柔道部が別府警察署の道場を借りて練習開始
6月10日	三重町主催・源氏ボタル観賞会への招待
6月17日	サッカーJ2・大分トリニータ公式戦への学生無料招待
6月27日	APU国連サークル・環境班が関の江海岸で清掃ボランティア活動
6月28日	別府市国際理解教室へ講師として留学生参加
6月29日	別府法人会主催・留学生交流会
6月29日	大分大学付属中学校懇談会
7月 1日	大分市八幡小学校PTAによるAPU親子見学会で留学生と交流
7月 1日	箏教室（秀絃会）への参加
7月 1日	少年犯罪防止・更正街頭啓発活動
7月 2日	別府留学生援護会主催・別府観光第2回バスツアー
7月 4日	亀川中央町2区公民館で留学生が講師でインド舞踊教室を開始（毎週火曜日夜）
7月 5日	別府市国際理解教室第2回へ講師として留学生参加
7月 7日	七夕飾り付け（ソルパセオ銀座商店街）
7月 8日	社会福祉法人太陽の家 タイ身障者との懇談会
7月 8日	日華親善協会講演会・懇親会
7月 9日	インドネシア研修生・大分県民との交歓会（別府湾ロイヤルホテル）
7月 9日	大分詩道会 吟剣舞道会
7月13日	大分県主催シンポジウム「留学生から見た大分県」
7月15日	本耶馬渓町 小中学生韓国研修旅行事前学習
7月20日	別府八湯ゆかたピンポン大会（竹瓦温泉付近）
7月23日	東奥山交流拠点オープン記念式典
7月29日~30日	ゆかたに下駄の卓球大会（日田観光協会）
8月 2日	別府市サザンクロス主催「外国の料理と語らい」に留学生が講師として参加
8月 2日	大分マレーシア協会 マレーシア留学生交歓会
8月 4日	若宮ふれあい縁日（山香町若宮商店街）
8月 5日	幸せ祭り2000（日出町・日本テキサスインスツルメンツ）
8月 5日	亀川夏祭り（さんもく会）
8月 9日	山香幼稚園・児童館との交流
8月19日	ベイサイドルネッサンス2000 in 別府
8月20日	扇山祭り（別府市内）
8月24日~9月21日	留学生地域社会交流会（大分県国際交流課 期間中2泊3日のツアーに学生無料招待）
8月25日	浜脇薬師祭り（別府市内）
8月27日	別府中央商工連合会ふれあいの夕べ（港中央通り）
9月15・16日	アジア太平洋フェスタ（別府留学生援護会 1泊2日のツアーに市内在住留学生を無料招待）
9月15日	北東アジア港湾シンポジウム 県土木建築部 通訳ボランティア及び参加
9月17日	安心院ぶどう狩りツアー 別府ライオンズクラブ
9月17日	敬老会 別府石垣西自治会
9月17日	敬老会 新別府自治会
9月18日	留学生無料ヘアカット
9月21日	大分雄城台高校文化祭
9月26日	中小企業家との交流会 中小企業家同友会別府支部
9月30日	別府市国際理解教室第3回へ講師として留学生参加
10月7日・8日	国東100Kmマラソン 学生ボランティア
10月7日・8日	Beppu ドリームバル
10月11日	九州地方知事会と九州・山口経済連合会との第16回意見交換会及び第116回九州地方知事会
10月14日	国東中学校・APU学生交流会
10月14日・15日	院内国際交流会 バーベキューパーティー、ホームステイ
10月15日	鶴見病院祭り 踊り・出店
10月17日・18日	アジア彫刻展 スリランカの芸術家対応 スリランカ学生アルバイト
10月20日	第7回アジア九州地域交流サミット 通訳・ボランティア派遣
10月21日	別府市国際理解教室第4回へ講師として留学生参加
10月21日	宇佐産業科学高等学校との交流会
10月29日	清川村ふれあい福祉祭り
10月29日	アジア彫刻展（朝地町）など見学ツアー

TOPICS on APU

2002年FIFAワールドカップ大分開催に向け、APU学生100名がボランティア登録



APUが立地する大分県は、二〇〇二年日韓ワールドカップ（W杯）の九州唯一の会場として選ばれています。開催を二年後に控え、FIFA W杯大分推進委員会と同県国際交流センターが中心となって呼びかけた大会開催・運営のサポートに携わるボランティアの募集及び応募者への研修が既に県内各地で実施されています。

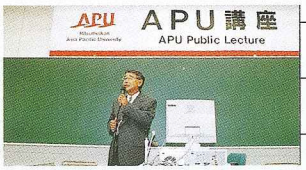
世界中の人々が熱狂するといわれる、このスポーツイベントの大分開催に対するAPU学生の関心も非常に高く、二種類のボランティア（一般・語学）に、約百名の学生が登録しています。入学前からW杯ボランティアへの参加意欲を見せていた学生、高校時代に様々なボランティアの活動をしたことのある学生、自分のもつ言語能力を活かしてW杯に貢献したいと希望を持つ学生など、APUからはユニークなキャリア・個性を持つ学生達がエントリーしています。

語学ボランティア養成講座（APU教室棟）

地元の各方面からも、文化・言語の多様性が特徴的な環境で学習生活を送るAPU学生に大きな期待が寄せられており、ボランティアに登録している学生達はそれぞれ、来るべき二〇〇二年に向けて一層の自己研鑽に励んでいます。

TOPICS on APU

第10回　APU講座開催



九月二十三日、APU内教室棟において市民を対象にしたAPU講座が開催されました。この講座は、これまで別府市内の会場で行っており、今回初めてAPUキャンパスを会場に実施されました。一九九八年六月の第一回立命館おおいた講座の開講から数えると、十回目の公開講座となりました。

今回は、APUアジア太平洋学部福井 捷朗 教授が、「東南アジアにおける古代文明と環境」をテーマに講義しました。会場に集まった七十名の受講生を前に、なぜ六つの文明は衰退の道を辿ったのか、また、その原因は何であり、生態的環境がどの程度、いかに関わっているのか、東南アジア地域研究の第一人者である福井教授は、古代から現代までの現地での稲作技術の変遷過程にも詳しく触れながら解説されました。

終了後回収したアンケートには、「何十年ぶりかで学生気分になりました。タイムスリップして学生になった私にとって、スクリーンに写し出される図表・地図・写真などは非常に理解しやすかった」といった受講者からの声が寄せられました。

今後のAPU講座スケジュール

■第11回　10月21日（土）
「アジア太平洋地域の異文化を知るということ」
清家 久美 氏（アジア太平洋学部専任講師）

■第12回　11月18日（土）
「都市間協力と国連」
鈴木 絲子 氏（アジア太平洋学部長）

■第13回　12月 9日（土）
「アジア太平洋地域における日本文学」
木村 一信 氏（アジア太平洋学部教授）

■第14回　1月13日（土）
「外国人が見た日本語のおもしろさ」
張　麟声 氏
（アジア太平洋マネジメント学部教授）

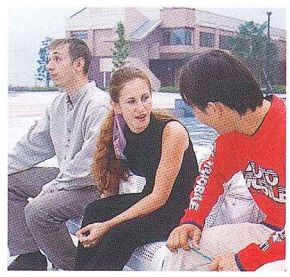
TOPICS on APU

日本学術会議第三部別府シンポジウムAPUにて開催

六月三十日、APUキャンパスにおいて、日本学術会議第三部会員とAPU教員による、「二十一世紀の経済社会とアジア太平洋」をテーマとしたシンポジウムを開催しました。

「日本学術会議」は科学者の代表により組織された内閣総理大臣所轄の機関であり、今回のシンポジウムは、経済学・商学・経営学を専門分野とする「第三部」が学術の成果を国民に還元するための活動の一環として開催したものです。

シンポジウムは全体会議とシンポジウムの二部構成で行われました。はじめに井上信幸別府市長らの開会挨拶の後、坂本和一APU学長、竹内啓日本学術会議第三部会員（東京大学名誉教授）による基調講演がミレニアムホールにおいて行われ、APUの学生・教職員・地元の市民の方々を中心に約三百名の参加を得ました。

会場をスチューデントホールへ移し、百人規模で行われたシンポジウムでは、岡本康雄日本学術会議第三部長（東京大学名誉教授）、鈴木絲子APUアジア太平洋学部長らによる報告の後、宮本憲一日本学術会議第三部会員（大阪市立大学名誉教授）をコーディネーターとして活発な討論が展開されました。また、参加したAPU学生からは、予定時間をオーバーするほど活発に質問が投げかけられ、意欲的な学生たちの姿勢がシンポジウムを一層意義あるものにしました。

発行：学校法人立命館
〒603-8577京都市北区等持院北町56ー1
TEL.075-465-8366（理事長室）